

行はれたる説にして、既に一二四五年羅馬法王の使命を奉じて蒙古に使せし Pian de Carpini は「Uigur はネストル教徒の用ゐたる文字を襲用せり」と記し、一八二〇年 Klaproth 氏は「中世紀に於て蒙古地方を訪ひたる僧侶及び Marco Polo の記する所に依れば、此の地方、特に Uigur 人の間にネストル派の基督教が行はれたるを知るべし、思ふに之を傳へたるものはシリヤの僧侶なるべし、此の僧侶に依りてシリヤ文字も傳へられ、而して此の文字より更に回鶻文字が発達したるものなることは明らかなり、何となれば、回鶻文字は次に示すが如く啻にシリヤ文字と個々類似を有するのみならず、又其のサバイ文字 (Sabäisches Alphabet) と形に於ても文字の連接の方法に於ても、全く合一するものなること、亦次表によりて明らかならざらん」と云ひて、回鶻文字とエストラングロ (Est-ranghelo) シリヤ、ネストル教徒の用ゐたる文字との對照表を掲げたり、而して氏の註記する所によれば、此の類似につきては既に一七三二年に Th. S. Bayer 氏が Actis Eruditorum に於て論じたる所なりと云ふ、之より後此の文字の系統を論ずるものは、皆此の説を奉じて疑ふ無かりしが、更に彼の Kara Balgassun の回鶻碑文の發見せらるるや、Schlegel 氏は一八九六年其の殘存せる漢文を讀解し、³⁵ 碑文中牟羽可汗に當る可汗の時、初めて回鶻に傳へらるゝに至れりと記さるゝ宗教が、ネストル派の基督教なることを主張し、而して此の碑の一部に記さるゝシリヤ字の草體に類せる文字を Radloff, Thomsen の諸氏が回鶻文字と定めたれば、此の碑文はかの回鶻文字はシリヤ文字に發し、ネストル教徒が作成したるものなりとの從來より行はれたる説を益々確實ならしめ、且つ其の上に更に一步を進めしむるものなりとし、終に回鶻字の系統及び其の行はるゝに至りし時代につきて前章³⁶に述べたる如き論述を爲すに至れり。茲に於て此の主張は益々有力となりしが、然も上に述ぶる所によりて明らかなるが